

報告3（JAいわて花巻）への質問

Q 農家組合の構成、営農を行っていない組合員やJAを利用しない組合員の加入状況は？そして農家組合の規模、1組合の平均加入人数、活動内容について教えてください。

JAいわて花巻（瀬川） すべての正組合員が農家組合に所属します。また准組合員も、一緒になってコミュニティ活動をする場合には農家組合に入っていたり、それに対して活動の助成金を支払うことになっています。

農家組合の活動ですが、営農部の主な活動は農地の利用調整です。「今度離農するから誰か耕作してくれる人はいないか」といった土地利用に関する話や、遊休農地があれば「皆で何かつくってみないか」といった話を集落の中でしていただくというのがメインです。一方、生活部の活動は、農協の女性部とタイアップし

て、料理講習をしたり味噌を作ってみたりというのが主で、男性も活動しています。そしてJAからは、地域別に農家組合長や営農部長、生活部長の集合研修などを行なっています。

Q 当JAの農家組合には、営農をしていない組合員も結構います。役職が回ってきたりするのは面倒だということでも農家組合を脱退したいといった話があり、農家組合の組織自体が危うくなってきたところがあります。そこらへんは全く懸念がないのでしょうか。

JAいわて花巻（瀬川） あります。今回、当JAは支店と営農センターの統廃合をやるのですが、そのようなかで、たとえば「もう農協の活動（女性部や青年部）には参加したくない、わずらわしい」といった話をされる地域の方もいます。そういう地域には、農家組合のエリアを統合再編するといった対応をさせていただきます。

Q 農家組合育成の効果、その具体的な手法・コツを教えてください。それからJAいわて花巻は他の地域とどこが違うのでしょうか。どういう特徴があるのでしょうか。

瀬川 もともと農家組合はその集落ごとのつながりが強かったということです。今は再編して360ほどの組合になっていますが、以前はもつと小さな隣組、親類縁者といった、まとまりのある活動でした。そこにJAはいろいろな助成金をつけながら関わってきました。しかし、集落ごぞつて農協外に米を出荷するといふような農家組合中にはありません。農家組合は自主的組織ですから、農協としては、米がダメでも生産資材を使ってもらうとか、貯金を使ってもらおうとか、いろいろなかたちで関わっています。また、支店ごとに開催する農協のイベントにまずは参加していただくとうとしています。このように、事業に直接関連させないで、まずは地域の中の顔の見える範囲内で、お互いに共通認識があるなかで普段の営農生活を営んでもらうというのが勘どころかと思えます。その生活活動の財源もなかなか最近は厳しくなっているのですが、

先ほどの報告で約2億円程と話しましたが、額はあまり減らさずに活動を誘導しています。

Q カントリーエレベーター（CE）の自主運営について説明されましたが、かなり大きな仕事、難しい仕事だと感じました。自主運営の施設がいくつも建っているという仕掛け、その根底にある私たちの農協との違いは、最終的には組合員教育ではないかと感じます。組合員教育で、「ここが他とは違う」ということがあれば教えていただきたいと思えます。

瀬川 特別なことはやっていないと思いますが、強いて言えば、農家組合のなかでも昭和の時代のお父さんたちはなかなか団結力があるというかワンマンな方が多くて、そういう地域に対しての貢献度や意識が高い人たちをリーダーにすえ、バックアップしていきたいです。そのような人たちは、おのずと市議員や農業委員や農協理事などの経験者だったりするので、まずはそういうところから外堀を埋めて態勢を固め、あとは皆さんがついてくるというような感じでしょうか。リーダーが肝心です。今は市町村合併で議員の数も

減っていますが、昭和の時代は結構そういうことが活発であつて、まとまりもあるわけです。そういうようなこともまとまりも生かしながら、密接にかかわっていきます。

吉田 自主運営の組織には、農協べつたりという人も入っているのでしょうか。



瀬川 自主運営で法人を立ち上げていただいておりますが、構成員の中には農協に出さない方も含まれております。今までは出さなかつたけれども、CEに入つたものは全部農協に来ますので、そういう面でも助かっています。どうしてもCEの利用がイヤだという方については、大規模なライスセンター（RC）を国庫事業で建てています。それにしてもなかなか経費がかかりますので、後は労働力の分散で、刈り取つたらその晩だけRCで予備乾燥させてからCEに持つてくるというような手法も取りながら、お互いにメリツトのある使い方をしているようです。

吉田 農家組合も含めて、農協に出す・出さないも関

係なく、きちんと扱っているということが重要なのですよね。

会場より 当地域では、大手農機メーカーが法人に倉庫やRCを貸し出しているところがいくつも見られます。米も資材もそちらに流れていくおそれがあります。CE施設の整備・再編や自主運営化は、当JAでも近々にやりたいと思っています。

Q（今村代表委員） 今の話に関連するかもしれませんが、かねてより私は、JAいわて花巻が営農指導事業に全力で取り組んでいることをよく知っています。それはまた非常に効果を現しています。特に秋田県境の山から太平洋側に至るまで横に長い管内で、極端に言うとな種が違いくらい組合員のやり方や考え方が違うなか、大合併せざるをえませんでした。そうした状況下で話を聞いたり現地を拜見したりしてきましたが、他のJAと違うのは、女性の支店長の割合が非常に高く、それがいいと聞いています。私はまだそれを実証はしていませんが、一般的にはそのように言われています。その女性支店長と地域の営農指導とは

何か関係があるのでしょいか。支店に出入りするのに、あまり敷居が高くなく気軽に行けるといふようなことが関係あるのかとか、いろいろ考えています。これが一つ目の質問です。

二つ目の質問です。花巻はかつて若いときには何度も行きまして、雑穀を非常に高く評価しておりました。これは健康食品にいずれなるだろうと。雑穀の栽培は主として女性の高齢者、おばあちゃんたちが非常に丁寧にやっているとが多かったものです。安全安心はもちろんなのですが、健康志向の状況のなかで販売戦略をどのように考えているのでしょいか。都市の高齢者は私なども含めて米の中に雑穀を入れて炊く場合があるのですが、遠隔地でもあることからなかなか手に入らないのです。何かもう少し販売戦略を考えたらどうでしょいか。私が住んでいる千葉県の柏の直売所では、もち麦が入荷したらあつという間に売れるんです。山積みをしていても1人2袋まで限定で、それ以上は売ってくれません。私ももち麦は食べているのですが、花巻の雑穀はなかなか手に入らないので質問したかったのです。雑穀の販売戦略や流通戦略はどのように考えているのでしょいか。

瀬川 まず女性の管理職・支店長については、今も昔と同様に支店長は3分の1ぐらいが女性です。本店には女性の課長がおりますし、女性部の部長もおります。女性はかなりきついことを言っても大目に見られるということもあつて（笑）、非常にウケがいいです。広域JAですので、管理職になればエリアをまたがって自分の出身地でない所に赴任しなければならず、沿岸部から本店のある花巻に単身赴任で来ている支店長もいます。農協に米を出さない方も、女性支店長がいる日にはコロツと共済に入ったりすることもあつて（笑）。全くの出身地で支店長をしているという方はいません。大概は、エリアの異なるところから来て支店長をしています。そしてかなり努力し勉強し、生産者の勘どころをつかみながらやっているようです。今後も女性の管理者は増えてくるのではないかと思つております。また、女性の営農指導員も結構おります。市場の受けが非常にいいです。主には園芸の指導ですが、昨今は畜産にも女性の指導員として大卒の方が入つてきております。

2点目の雑穀の振興については、お話のとおり、高

齢者が中心になって雑穀栽培をしています。一時期ブームになって取り組み、そのブームの火を消さないよう国からの産地交付金を使って地域メニューをやっているのですが、農薬を使わず栽培しますので手間がかかります。乾燥させる際にも専用の乾燥機などがないので、ビニールハウスの中でブルーシートを敷いて天日干し乾燥させています。高齢者も「年金をもらっているほうがいいや」と辞めていく方も多いのですが、まずは細々と続けていますし、おっしゃるとおり全国的に需要はまだありますので、「プロ農夢花巻」というJ Aの子会社で栽培を指導し、販売しています。子会社では雑穀1品種だけで商売しているわけではなく、いくつかの雑穀をミックスして小袋で販売しています。雑穀が足りない場合には、全国を回って集めている状況です。もち麦も地域で生産をしています。

今村 ありがとうございます。ついにながら関連してちよつとPRをしたいのですが、私は都市農山漁村交流活性化機構（略称…まちむら交流機構）の理事長もしています。「全国農産物直売サミット」を主催しており、つい先だつては第18回を山形県鶴岡市で開催

し、北海道から沖縄まで300人以上の出席者が来て大変盛会でした。直売サミットをやっていると、直売所はいろいろなノウハウを持つているのにそれが広がっていないと感じます。それから優れた直売所とそうでない直売所の落差が非常に大きいのです。それは農協のせいなのか何なのか。もっと私が若かったら、もう一度足で歩いて調査したいと思っています。去年は和歌山で開催しましたが、直売所間のネットワークを作っているのです。例えばJ Aいわて花巻の直売所「だあすこ」のリングを和歌山の直売所のカンキツとパートナーしていて、非常に好評だと言っております。日本は南北に長いので、作物もずいぶん違いますので、何かそのような新しいネットワークができないかと思っています。「全国農産物直売所ネットワーク」というものもやっており、これは私が生きている限りは続けていこうと思っています。参考までにちよつと紹介させていただきます。

Q 共乾施設の建設から運営まで、利用組合によって自主運営されているという事例は、思い切ったことを実現され、本当に素晴らしいと驚きました。翻つてう

ちの県で考えてみますと、自主運営に対する農家組合員の不安はなかなか払拭できず、そのため合意形成が難しいという気がします。もちろんJAが丸抱えで今までどおりにやるというのは問題だと思いますし、利用率の向上という点からも自主的な運営は必要と思っています。

そこで、一つのやり方として、JAで子会社もしくは連結対象にならないような出資割合の会社を組合員と一緒に作るというようなこともあるのではないのでしょうか。例えば、建設資金はJAが出すけれども運営は自主的に組合員にやってもいい、その運営のチェックはJAがする、というようなスキームでの自主運営というのも一つのアイデアかなと思います。この点どのようにお考えでしょうか？

当県の担い手の場合は自分で乾燥施設を持っていて、他の農家からの乾燥請負がけっこうな収益源になっているため、自主運営の施設を建てたとしても担い手にしっかりと利用してもらえないかという課題があります。やはりリスクをできるだけ分散したうえでやっていきたいと考えてはいるのですが、それについてのご意見をお願いします。

瀬川 自主運営を始める際に、山形県ではCE・RCをJAが取得して利用させているという話を聞いて、見に行かせていただきました。当初はそのような計画で走ったのですが、どうしてもJAでは固定資産比率の関係から固定資産を取得することはままならず、計画が頓挫しました。しかし地域の皆さんがやはり共乾施設が欲しいと気運が盛り上がり、「自主運営の法人を立ち上げて自分たちで事業申請する」と直接農協の組合長に宣言されました。農協はそれに



画が頓挫しました。しかし地域の皆さんがやはり共乾施設が欲しいと気運が盛り上がり、「自主運営の法人を立ち上げて自分たちで事業申請する」と直接農協の組合長に宣言されました。農協はそれに

対してバックアップをしましょうということと建設が進んだのが、平成17年に稼働した最初の自主運営施設です。

その後10年間は、そのような話は一つも出ませんでした。その間にJAの利用施設は他にも建設していません。しかし、JAの経営が悪くなり、どうしても取得は無理という状況になってきました。そんななかで平成27年以降、再び自主運営の施設を建設してきました。

今も令和2年の10億円ほどかかる事業として申請している案件があります。それも自主運営なのですが、七つの法人が自分たちで出資してその事業をやりたいとしています。その事業の内容は、小麦の種子と大豆の乾燥調製をやりたいというものです。小麦だけでは収支が合わないのが大豆もやるということです。どちらも一つの支店の単位の中ではなくて地域を飛び越えた広域で利用をする、法人の新たな取り組みとしてやっていたりすることしております。そこには一般の生産者も利用していただくこととなります。法人だけが使う施設ではなくて、農協の大豆・小麦の生産に必要な施設だという位置づけに納得してやっていただくと思っています。

なによりも「自主性をどこに持たせるか」ということかと感じています。